

祝卒業

スクバの青春



校長 村上 英治

「3年間毎日遠い藤枝までありがとうございました」

卒業式を終えた後、藤枝便のスクールバスの前に立っていた運転手さんにその女生徒はそう話しかけ頭を下げた。突然のことで驚いたのか、その運転手さんは慌てて、「いや、どうも」と言葉を返した。

私はその光景を偶然見かけた。行動や言葉にはその人の心根が現れる。心動かされ少し目頭が熱くなった。

彼女はいつも放課後、スクールバスの待ち時間 2 階のフリースペースで勉強していた。学校生活が充実していること、友達とおしゃべりするのが楽しいこと、諸事情で県内の大学に進学したいこと、短時間ではあるが彼女の学校生活や将来の希望の一部を聞き取ることができた。笑顔というのは人を安心させる。彼女はいつも笑顔だった。

スクールバスを利用している生徒は、異口同音にこう言う。

「こんなに楽で快適で素晴らしいものはありません」

雨の日も風の日も指定されたバス停で待ってさえいれば、スクールバスはやってきて学校まで安全に連れて行ってくれる。帰りも然りだ。乗り換える面倒や煩わしさはない。そんなスクールバスに 3 年間お世話になった生徒たちはこう嘆く。

「もうスクールバスに私は乗れないんですね」「隣の海洋学部に進学するんです。乗せてください」「きっと走っているスクバを見たら悲しくなってしまうんだろうなあ。スクバに乗れる高校生が羨ましい」「今日でスクバは最後、あ～私の高校時代、青春が終わった!」

翔洋の生徒達にとってスクールバスは青春、高校生活そのものだったのだろう。生徒たちのスクールバスの短縮形スクバは、1000 日の高校生活とともにあった。中等部出身者なら 2000 日である。喜びも悲しみも、嬉しいことも、つらいことも共に分かち合う仲間、友だったのかもしれない。

卒業式にお礼のあいさつをした女生徒は県内の大学に合格し進学した。藤枝から草薙の高台にある校舎に通っている。きっとどこかでスクバを見かけていることだろう。

懐かしい思い出がよみがえってくるのか、それとも、「また、スクバに乗せてほしいんだよね」と笑顔で友達に話しかけているのか。

聞いてみたい気がする。

学年主任よりメッセージ



中等部 3 学年主任 込山 典寿

3年生の皆さん、保護者の皆様、ご卒業おめでとうございます。さて、私は、入学式前のオリエンテーションにて、皆さんの前で次のような話をしました。

～「学習塾」などの顧客は「生徒」でいい。塾に入ったからには、生徒を満足せられるようなコンテンツを塾が提供して、生徒の学力が伸びるという関係でこれらは成り立っています。しかし、「学校」の顧客は「社会」です。君たちは、これから先の社会を満足させられるような人間性を、学校で磨き上げていく必要があります。この先の「社会」が感動してくれるような人間性を生徒らと共に、磨き上げる研究を毎日していきたいと思います。皆さんとの3年間を楽しみにしています。～

あれから約 1000 日経りましたが、コロナのせいではなく、コロナのおかげで成長できたと感謝の気持ちを言えるような成長を生徒らは遂げており、頼もしく思います。そして、本校での毎日の生活から、素晴らしい付加価値を得ることができました。それは努力です。学校生活や部活動における努力の毎日は、必ずしも我々に良い結果を保証してくれるものではありませんが、努力は私たちに様々なことにチャレンジする勇気を与えてくれました。フィギアスケートの羽生結弦選手も言うように、努力は裏切ることもあるわけですが、中学生であろうが、代表選手であろうが、結果に対する責任に対して、チャレンジする切符を手にいれることができるのは、努力した人間だけなのだと思います。卒業生 140 名の中学校生活での努力に裏付けされた、今後の勇気あるチャレンジを心より応援しております。

最後に、行動で伝えるという日本の風土の良さ。
空気を読む、という日本の良い慣習もありますが、
ポジティブな言葉や気持ちを特に伝えられたら、素晴らしいと思いますので、最も伝えたい言葉を、最後に述べて結びとします。

「ありがとうございます。大変感謝致します。」